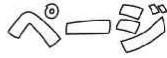


# ホーム



## My favorite book

「街の声を聴きに」

著者/利重剛 発行/1998 角川書店

レファレンス課 熊井あづさ

著者である利重剛との出会いは、私が中学生の時テレビドラマに出ている俳優としての彼でした。その後映画監督、エッセイストとしても活躍していることを知り、彼の著書「街の声を聴きに」に出会いました。これは彼が訪れた街についてや、ふとした日常のことを書いたもので毎日の生活の中で出会った様々な出来事についての考えや感情を素直に綴っています。例えば、散歩に行った時の話、好きな場所（空間）の話、街で出会った人のことなどなど。

私の生活は、毎日同じことの繰り返しでもしろくなく、嫌な事があると不満だらけでも生きていくためには仕方がない事もあるし、自分なりに良いように解釈したりして過ごしていました。でもこの本は、考えて生きること。考え方1つで輝いた毎日を送れること。面白くない人生を送っているのならそういう生活を作っているのはほかならぬ自分自身だという当たり前のことを気づかせてくれたのです。嫌なこと悲しいことがあってもその感情があるということは生きていく証拠なんだと。今は、嫌なことがあってもその感情が生まれたことに幸せでいられる自分がいます。

例えば、雨降りの日は仕事に行くのが嫌で濡れるとイライラしたり、でも彼は「雨が降りはじめた時に次々と傘の花が咲いて街の色がさーっと一斉に変わっていくあの感じはいいなと思う」と書いているのです。私は今まで傘を花が咲くようになって見たことがなく、こんなふうに感じられる彼は素敵だと思いました。それから私は雨の日が少し好きになり

ました。彼は他の雑誌にも旅の話の中で「嬉しいとか悲しいとか簡単に説明のできない不思議な感情というのはまだまだ沢山あって、そのうちの半分にすら巡り合っていないんだろうなと思う。そう思うとなんだか嬉しい。長く生きていく甲斐がある」と書いています。日々の簡単に説明のできない感情を大事にしている彼が書いた本だからこそ私は共感し、感動したのだと思います。この本は、日々を淡々と過ごすのではなくたくさん感じてたくさん考えること。また、日々の生活から発見する色々な事への感情を大事にしてほしい。と言っているような気がします。そして、私はこの本に出会えたことで感動するものに出会えた喜びを知りました。

今世の中にはたくさんの出版物、情報があふれかえっています。時に何を信じればいいのかわからなくなることさえあります。こういう時代だからこそわくわくするようなものに出会ったときの感情は貴重だと思うのです。

私は、本学にない資料や文献のコピーを他機関から取り寄せる仕事をしています。先日到着した資料を見て目を輝かせている利用者がいました。そういう利用者のお手伝いができたことに喜びを感じ、もしかしてみなさんが、感動する本に出会うかもしれない場所で働いていること、またその感情に仕事を通して共有できることに幸せを感じます。

